言語と文化への気づきを学習者間で共有する活動が果たす役割

ー「研修活動の記録」と「週フィードバック」の分析からー

石井容子*・熊野七絵#

日本での体験を通じた言語や文化への気づきを個人で記述する「研修活動の記録」を学習者間で共有する「週フィードバック」活動を試みた。共有活動後の学習者の記述等を分析した結果、この活動は①共感・確認、②新情報・視点の獲得、③日本イメージの修正とステレオタイプ化の防止、④他文化の理解・自文化の内省による複文化的視点の獲得、⑤日本語学習・文化理解へのさらなる動機づけといった役割を果たしていることがわかった。

「研修活動の記録」，「週フィードバック」，言語と文化，気づき，内省と共有

1．実践を行った研修の概要と自律学習支援

国際交流基金関西国際センターで実施している6週間の日本語履修大学生訪日研修は、①学習してきた日本語を使う、②日本を体験し理解する、③これからの日本語学習に役立つ発見をする、を目標とし、体験や交流といった活動を軸として日本語や日本文化・社会を学び、帰国後の継続学習へとつなげることを目指している。

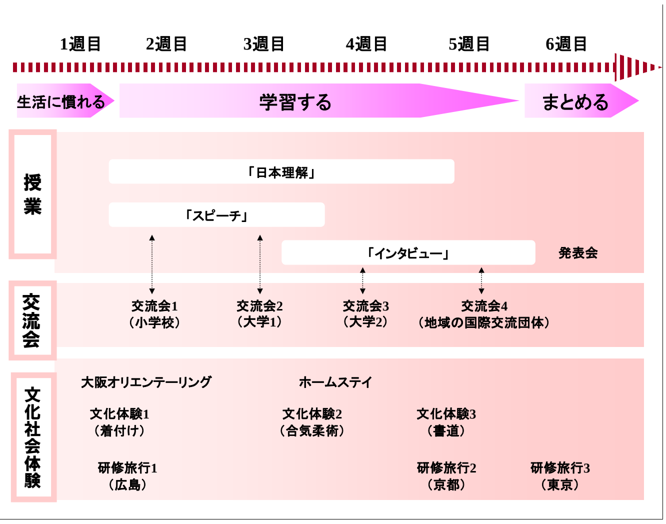

図1　体験や交流を中心とする大学生訪日研修の全体像

1．1．自律学習支援

この研修では、教師主導に慣れた比較的受身な学習者が、研修中のさまざまな活動に主

---

* ISHII, Yoko. 国際交流基金関西国際センター（Yoko_Ishii@jpf.go.jp）
# KUMANO, Nanae. 国際交流基金関西国際センター（Nanae_Kumano@jpf.go.jp）

体的に取り組み、自律的な学習者となっていくことを目指し、「自己目標設定・自己評価」、「研修活動の記録」、「週フィードバック」を設定している。学習者は、研修開始時にまず教師やクラスメートとの話し合いの中から研修中に達成したい日本語と体験についての自己目標を立てる。その後、週に一度、各自で一週間の活動や体験を振り返って「研修活動の記録」を書き、その活動記録をもとに、気づきを共有しあう「週フィードバック」の活動を行う。そして、研修修了時には、教師やクラスメートと共に記録を振り返りながら自己評価を行い、研修終了後の継続学習の目標を立てる。

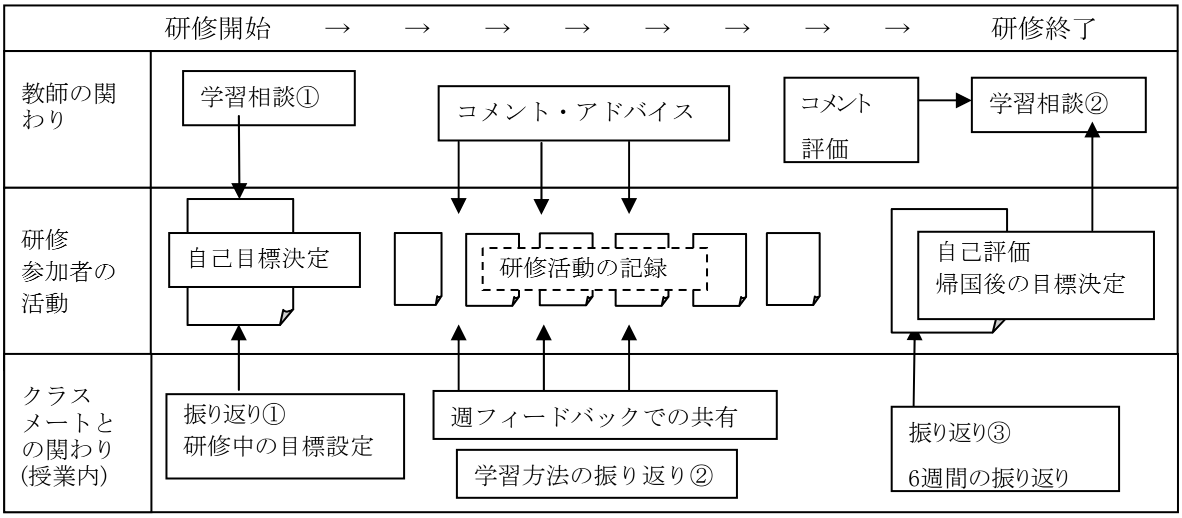

図2　自律学習支援・評価の全体像

1．2．「研修活動の記録」と「週フィードバック」

「研修活動の記録」は、ある特定の授業を対象とするものではなく、研修全般及び日本での生活の中での気づきを「日本語、体験、生活」の３つの観点からまとめ、それぞれに具体的なエピソードや考えを交えて記述するものであり、学習者が内省活動に慣れることを狙いとしている。

図3　研修活動の記録（例）

「週フィードバック」では、研修に参加する30名程度の学習者が全員集まり、まず、4，5名のグループ内で「研修活動の記録」の項目ごとに、個々の記述に基づいて話し、相互に質問したり、話し合ったりする。次に、各グループから1人が印象的だった意見などをまとめて全体に向け発表し、自由に全体ディスカッションを行う。学習者はその後、「週フィードバック」で気づいたことや考えたことを「研修活動の記録」に書き加え、担当教師に提出する。教師は日本語面の添削とともに、内省を深めるためのアドバイスを記入し、学習者に返却する。

石井・熊野（2008）では、この「研修活動の記録」をもとに、学習者の日本語や日本文化・社会への気づきがどう変化し、自己評価にどのような影響を与えるかを分析し、個人内の変容の過程について論じた。日本語面では、学習者は内省を繰り返す中で、日本人の生きた日本語や学習者自身の日本語運用能力への気づきから、帰国後の目標へつながる記述へと内省を深めていた。また、社会・文化面では、体験・交流や生活の中での気づきを繰り返しながら、独自の視点で考察を深め、新たな日本観を作っていく様子が窺えた。
日々の発見や驚きを定期的に記述させることが、言語や文化について見つめ、考察する姿勢を作り、また、それを振り返ることが最終的な自己評価へ繋がっていくことがわかった。

2.「週フィードバック」の果たした役割

一方、この「活動記録」を元に、学習者間で気づきを共有する「週フィードバック」はどのような役割を果たしているのだろうか。「週フィードバック」後の記録への記述、全体共有ディスカッションの流れ、研修生のアンケート（３コース102名分）や聞き取り調査の結果から分析し、考察した。

図４は「研修活動の記録」や「週フィードバック」といった自律学習支援の各活動段階がどのような役割を果たしていたのかを示したものである。特に「週フィードバック」における共有が果たす役割を中心に、学習者の記述やディスカッションの流れ例を示した。
尚、各項目の例は、「週フィードバック」終了時に学習者が共有で得た気づきや考えを「研修活動の記録」に記述した部分から抜粋した。括弧（）は、わかりにくい部分に筆者が加筆したものであるが、その他は研修生の記述のママである。また、ディスカッション例は、グループディスカッション後の全体ディスカッションの流れを教師がメモしたものから主要な流れのみを記載した。

既に述べたように、「研修活動の記録」では、気づきを定期的に記述することで、内省が深まり、言語や文化、学習についての個人内のイメージ修正や変容が進む。一方、「週フィードバック」では、共有活動が次のような役割を果たしていた。まず、グループ内で個々の体験や意見をシェアする活動では、同じ意見によって共感・確認したり（①）、違う意見によって新しい情報や視点を得ている（②）。また、その後グループ内でいろいろな意見が出たり、全体でのディスカッションに発展する場合は、多様な視点から言語や文化のイメージに揺さぶりがかけられることで、ステレオタイプ化の防止の役割を果たしたり（③）、日本に留まらない他の国々の事例や意見から柔軟な複文化的視点を獲得したり（④）、他者の声から各自の日本語学習や文化理解についてのさらなる内省の促しや新しい目標への動機づけにつながる（⑤）ことがわかった。

一方、学習者に「週フィードバック」の活動はどうだったかというアンケートや聞き取り調査をした結果、全体的な満足度も高く、「友達の意見はとてもおもしろい。いつもべつべつのクラスにいるみんなと一緒に話しあうことができ、楽しかった。」「みんなの意見を聞いて、自分の考えが広がった。人の意見から日本理解もできる。」「いろいろな国から来た友達と話すと、各民族が自分の独特なメンタリティーを持つので同じことでも反応が違うことを理解した。」など他者との共有や多様な視点からの意見交換の意義を強く感じているようであった。

個人の内省

「研修活動の記録」

↓

「週フィードバック」

シェア

①共感・確認

例:「皆の意見で同じことは「大阪弁がちょっと分かりにくい」という意見でした。皆が勉強した日本語は標準語ですから、大阪弁で話しかけられてあまり分からなくて当然だと思います。」

例:「みなさんちがう体験をしましたが、電車のふんいきのことはだいたい同じ意見を持っていました。みんながねたり、でんわでメールしたりして、自分のことだけ気にしました。冷たい感じをしました。」

②新情報・視点の獲得

例:「私は東京のねだんは大阪より高かったと思いましたから、ほかの意見を聞いてから、はんたいのいけんを聞くとびっくりしました。物によってちがうって気がついた。」

例:（友達の話を聞いて）「日本語の名前は漢字がない（こともある）ということをびっくりしました。私は名前の意味をあげる物だと思いますから、どうして漢字がない名前がありますかということをよくわかりません。」

ディスカッション

③日本イメージの修正とステレオタイプ化の防止

ディスカッション例：日本人のお父さんと子供は家事をしない→私のホストファミリーではお父さんも子供も家事をしていた→私の所は父はしていたが子供はしていなかった。

例「（〇〇さんは）大阪人はしんごうをまもらないといいました。でも私はさんせいじゃない。大阪人はしんごうをずっとまもると思います。いつもみどりの色をまっています。ひどいだと思います。」

④他文化の理解・自文化の内省による複文化的視点の獲得

例:「インドでもメキシコでも多くの方言があるとわかりました。でも多くの方言の国に住んでいる人も「方言を理解するため覚えるしかない」と言いました。」

例:「電車で女性専用車両がないのはシンガポールだけですか。フィリピンでもインドでもあるのは知りませんでした。でもシンガポールではあまりちかんの問題をきかないからその必要はないのかな。」

⑤日本語学習・文化理解へのさらなる動機づけ

例:「一番印象的なことはメンバーの日本語についてのきづき。正しい日本語で話せるようになった、分かる語彙が増えた、などを聞いて、自分の日本語を考えた。単語や聞き取りはよくなったが、聞かれてわかるのにどう答えたらいいか困る。」

例:「〇〇さんが日本文化だけでなく、他の国の文化も友達との話を通じてだんだん分かるようになっていると言うと、私はその世界中の文化の発見がこの研修の素晴らしい結果の一つだと感じました。それが日本語の改善とならんで重要なことであると思います。」

図４「週フィードバック」が果たした役割

3．考察

3．1．「週フィードバック」活動と複言語・複文化主義

この気づきを学習者間で共有するという活動は、複言語・複文化主義、あるいはそれらを養うこととどう結びつくのだろうか。

まず「複文化」について考察する。学習者は、自身の体験を通して、「日本人は親切だ」のように来日以前に既に持っていたイメージを強化したり、逆に「日本人はよく勉強すると思っていたが、大学生は余り勉強しない」のようにイメージを覆したまま再ステレオタイプ化しがちである。しかし、この活動により、例えば日本人に冷たくされた他者の経験や、懸命に勉強している大学生の存在などを知り、文化・社会が一様ではないという視点を得ることになる。また、「どんな人が外国人に冷たくしがちなのか」「勉強しない大学生の背景」のようにその現象についてディスカッションが行われることで、日本文化はより深く理解されていく。さらに、日本文化への気づきがきっかけではあるが、他文化背景を持つ者とそれをディスカッションすることは、自文化について振り返ることにも、他文化について知ることにもつながる。多様な視点からの意見を聞くことで、自文化を基準にした判断が世界的に普遍のことではないことに気づくからである。同じ国でも違う地方の学習者が異なる文化を持っていると気づくような場合も見られる。このように、学習者は共有活動を通して日本文化だけでなく自文化、他文化も含め様々な角度から文化を捉え、多様性を認める柔軟な「複文化」的視点を獲得していくのである。

一方、「複言語」については、日本語という特定言語についての気づきを話し合う活動の中で、「複言語」的視点が得られるものなのだろうか。学習者の日本語に関する気づきの中には、「大阪弁がどこででも使われている」「女性のイントネーションは好きだけど、年配男性の話し方はわかりにくい」のように、方言や世代・性別による話し方の違いなど日本語のバリエーションに関するものが多い。そこには「日本語」という言葉が一つのものではなく、多様であることに気づき、それを受容していく過程が見られ、共有活動においてもさらに日本語の多様性への理解を深めることとなる。また、他言語そのものを学ばなくとも、例えば「日本語ではあいづちが重要だ」という気づきから各国におけるあいづち表現を紹介し合ったり、各国の敬語のありようについて語り合うなど、コミュニケーションを取り巻く他言語の側面に触れる機会ともなる。また、他言語を母語とする学習者の話す日本語への観察から、その言語についての気づきを得る場合もある。始まりが日本語についての気づきであろうとも、彼らはそれを共有しディスカッションすることで、日本語を通して、やはりまた「複言語」的視点を獲得していくと言えるのではないだろうか。

3．2．　活動のデザインー「内省」と「共有」のサイクルー

このような活動を意味あるものとするには、ただ体験を共有させるのではなく、活動を効果的にデザインすることが重要である。図５は「内省」と「共有」の活動サイクルを図式化したものである。

まず、個人の内省を促すための仕掛けが必要である。意識しなければ通り過ぎていく日本での体験に注意を払い、意識し、内省し、考察するという過程がないままに体験をシェアしても、「○○は面白かった」といった感想の共有に留まるだろう。

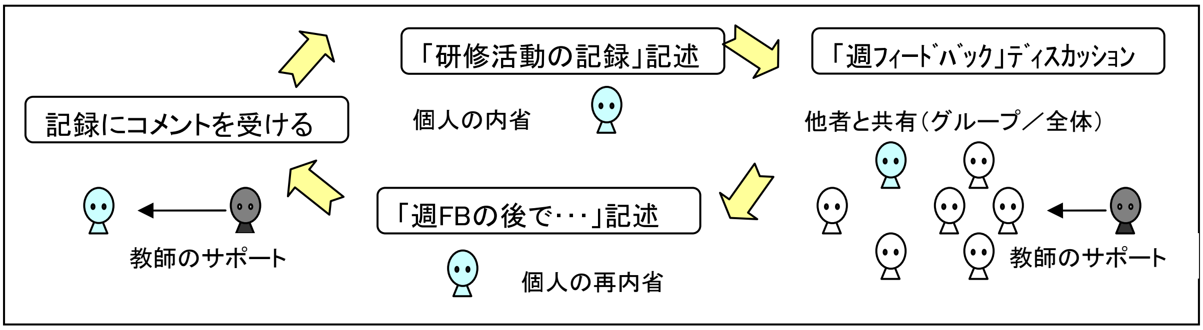

図５「内省」と「共有」の活動サイクル

「研修活動の記録」では、日本語学習や日本文化理解といったいわゆる教師目線で目標に直につながる点に限るのでなく、「日本語」「体験」「生活」というゆるやかなポイントから、広く言語や文化を取り巻く事象を、学習者個々の興味や視点から観察するよう促し、週末に体験の中で観察し、気づいたことを、振り返りながら内省し、自分なりに考察を深める時間を設定している。

次に、その気づきを他者と共有することである。「週フィードバック」では、気づきの発信の機会を設けるとともに、より多くの意見に触れるよう、グループ単位から全体へとディスカッションを繰り返す場を設定している。また、その過程で考えたことを記述させることで再内省を促している。この「個人の内省→他者との共有、ディスカッション→再内省」というサイクルを繰り返すことは、言語や文化への理解や考察を深め、多様性や柔軟性といった複言語・複文化的な視点と調整力を養う上で重要なポイントとなる。

一方、学習者自身の気づきや学習者同士のディスカッションを中心とした活動においては、支援者としての教師の役割も重要である。共有における学習者間での強い共感はステレオタイプを強化しかねず、また、現象の描写や紹介にとどまってしまい、日本の中の多様性や逆にある現象の普遍性に気づかないような場合も少なくない。このような時に教師から多様性を意識させたり、背景の考察を促すコメントを投げかけることは、有効な助けとなる。また全体ディスカッションの流れをサポートするだけでなく、「研修活動の記録」への個別のコメントは、個々の内省と考察をより一層深めるための助けとなる。

このように、気づきの共有のためには、個人で内省し、学習者間で共有、ディスカッションを行い、再内省するというサイクルと、それを教師が支え引き出すことが重要である。そうしてはじめて、このような活動が意味を持つのではないだろうか。

参考文献

石井容子・熊野七絵（2008）「日本語・日本文化社会への気づきを促す「研修活動の記録」－自律学習の意識化を目指して－」WEB版『日本語教育　実践研究フォーラム報告』（p1-10）日本語教育学会

熊野七絵(2008)「大学生短期訪日研修における体験交流型のコースデザイン」広島大学留学生センター紀要第18号（p31-46）

The role of activities in which students' share their observations on language and culture: from an analysis by " Weekly Journal" and " Weekly Feedback"